

2004年(平成16年)6月4日(金曜日)

岐阜

里山保全活動30選「ドングリの会」

病む森に育林23年……

「子ども一人、ドングリ一粒」合言葉に

里山などの環境を守る団体を全国から三十選び、活動をたたえる「日本の里山30保全活動コンテスト」(読売新聞社主催、環境省共催)で、三十団体の一つに選ばれたNPO法人

「ドングリの会」(清見村牧ヶ洞)会長の稲本正さん(59)は、「里山づくりは創立以来の目標だった。活動が評価されて、とてもうれしい」と自ら植えた木々に手を差しのべて話す。



「ドングリの会」の稲本会長

ドングリの会は、家具づくり工房「オークウィレッジ」を作った稲本さんが、子供たちに緑豊かで住みよい地球を残そうと、一九八一年に設立した。会の合言葉は「子ども一人、ドングリ一粒」。

本部のある清見村と東京都三鷹市に、ドングリの苗を育てる畑があり、年間一万本を育てている。また、清見村では針広混合林のモデルづくりに挑み、静岡県富士宮市では、富士山の森再生活動を続けている。さらに茨城県八郷町では

「くぬぎ平」の森づくり、東京都町田市の多摩丘陵では里山復元と、活動拠点は関東中部四か所に広がり、

会員数は約千人。ブラジルのアマゾンでも六年前から、森再生を手がけている。家具工房を始めるため、高山市から南西約十五キロの谷あいに購入した土地二・六五畝は、はげ山やススキが茂る斜面だった。「森から木を一本取ったら、一本返そう」とナラなどの広葉樹などを植え続けた。それらの木々は現在、一抱えもある大木に育っている。

ドングリの実から苗木を育て、植林をする。試行錯誤の末、実を雪解け水に浸して、「冬」を経験させることの大切さを学んだ。「木を植える以上に大変で大切なことは、病んでいく森を元気にする育林です」と強調する。里山を復活させ、新しい里山文化を創造するため、晩春から夏にかけて、全国の森を巡る忙しい日々を送っている。